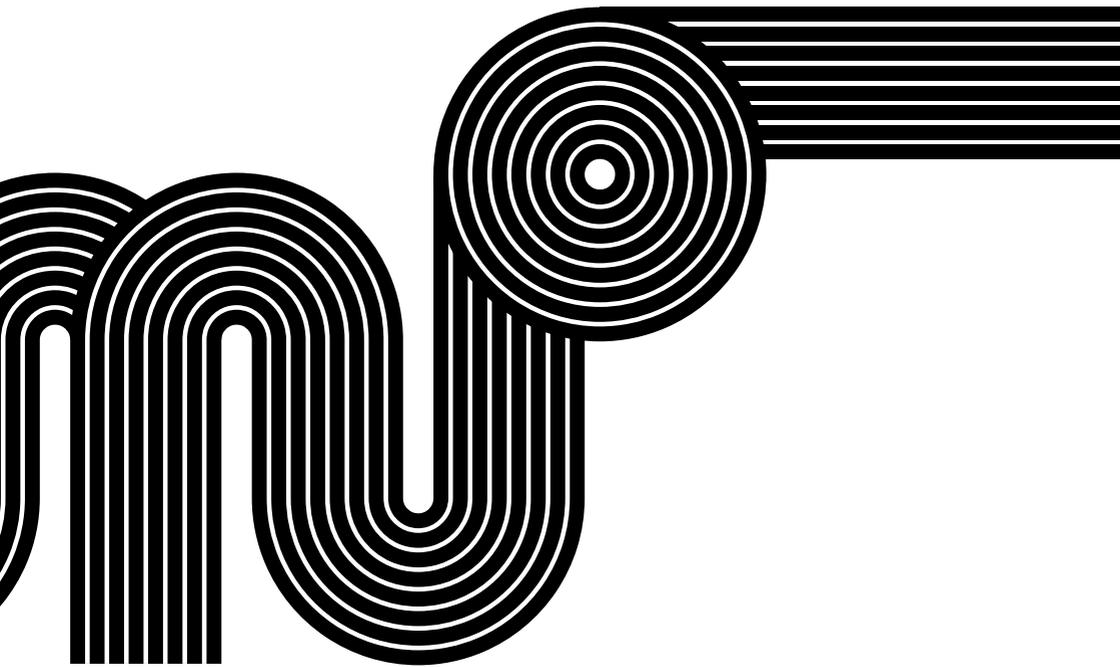
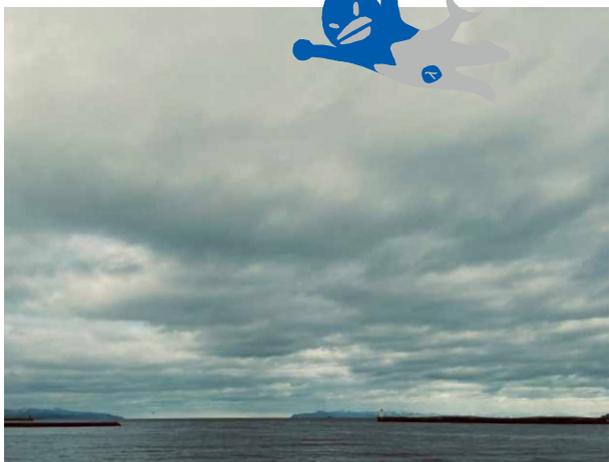


# ラムダの教科書 2

津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議編



# 目次

- 1 まえがき
- 2 第1部 ラムダ委員の活動紹介
- 19 第2部 ケーススタディ：ラムダ作戦会議inせんだい大志塾
- 35 編集後記

## 津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議

令和3年に世界文化遺産登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」が双方のエリアを一つの文化圏とみなしたように、津軽海峡は遙か昔から青森県と北海道を結ぶ架け橋になってきました。青函連絡船が行き来した時代を経て、平成28年には北海道新幹線が開業。迎えた時代の節目とともに、青森県では津軽海峡を挟んだ道南地域までを一つの圏域とする「津軽海峡交流圏」の形成に向けて、平成25年度から「λ(ラムダ)プロジェクト」に取り組んでいます。

プロジェクト名の「λ(ラムダ)」は、新函館北斗駅から新青森駅を通り八戸駅へと至る新幹線ルートと、新青森駅から弘前駅へと続く奥羽本線ルートを合わせた形が、ギリシャ文字のλ(ラムダ)に似ていることに由来。要所となる青森市、弘前市、八戸市、さらには青森県内4つ目の新幹線駅・奥津軽いまべつ駅周辺地域、下北地域などを含めた青森県全域と、道南地域との交流促進を目指しています。

プロジェクトの核になる「青森県津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議」は、平成25年度から28年度までの4年間、青森県にゆかりある委員が参画し、圏域内の活性化や圏域外からの交流人口増加などを目的としながら活動を進めてきました。平成29年度からは新たに北海道からも委員が選出され、「津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議」として連携を強化。過去の事例にとらわれない様々な提案とともに委員自らがあらたな流れを生み、先頭に立って行動する中、津軽海峡交流圏の輪が広がっています。



津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議ホームページ

<https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kikaku/kotsu/ramudasakusenkaigi.html>



## まえがき

この冊子は、昨年発行した『ラムダの教科書1』の続編にあたり、今回も津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議メンバーの活動を紹介するものです。

この『ラムダの教科書2』第1部では、前回、紹介できなかったラムダ作戦会議メンバーに登場いただき、各々の活動を紹介してもらっています。また、第2部はケーススタディとなっており、仙台市で開催されている「せんだい大志塾」にて、本誌の編集メンバーがラムダについて語ったパネルディスカッションの様子がまとめられています。このパネルディスカッションでは、この塾に参加する東北各地の若い自治体職員との対話が行われ、私たちがこれまで行ってきたラムダ作戦会議の活動を振り返るものとなっています。

『ラムダの教科書1』のまえがきでも書きましたが、私たちのラムダでの活動も10年を超え、「自ら汗をかく」だけでなく、私たちの経験を次の世代に伝えたいという想いが出てきました。「教科書」という硬いタイトルがついていますが、これは決して私たちを手本にしてほしいということではなく、こんなことをやると楽しそう、こんなこともやっていいんだ、自分たちでも何かできそう、などと考えるきっかけにもらいたいという思いを込めています。

今、津軽海峡交流圏では、新しい世代が、新しい感覚で地域のことを真剣に考え、地域で様々な活動を行うようになってきているのをマスコミなどの報道で見かけるようになってきました。新しい世代の今後の活躍がとても楽しみです。私たちも、新しい世代と交流を行いながら、新しい時代の津軽海峡交流圏を創っていきたくて考えています。ぜひ一緒に頑張っていきましょう。

## 1

き や とし お  
木谷 敏雄

株式会社ジェイ・ファイン 代表取締役  
出身：青森市、居住地：埼玉県川口市



## 活動紹介

## ◎津軽海峡圏 Well-Being 博で持続可能な圏域づくりへ

津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議の委員（※以下ラムダ委員）を拜命してから、いつか私のライフワークでもあるウェルネスツーリズムによる観光地域づくりを津軽海峡交流圏で具現化していきたいと考えていた。それが、いよいよ結実し、地方創生の起爆剤となり、短命県返上につながる、2020年10月に『津軽海峡圏ウェルネス博』開催にこぎつけたのである。



謎の縄文人がマギューロウにウェルネス生活を指南!?

「働き盛りに健康プログラムを！」と声高に言っても、仕事に追われ、疲労困憊していたら、グータラな週末からは脱却できるものではない。健康への気づきにつながるプログラムとのワクワクドキドキな出会いが重要なのである。

ラムダ委員の一人、大間のYプロジェクト（株）の島康子氏は「自分は早起きは苦手。だけど、頑張っ、かみのやま温泉（山形県）の早朝ウォーキングに参加したら、楽しくて。その後3日間くらい調子よく過ごすことができました」。下北の薬研・下風呂温泉で健康ウォーキングを実施するきっかけになったという。

私自身は「あの不健康の代表といわれる金木町出身の文豪、太宰治もこのプログラムに参加していたら健康な生活を送れたはず」をコンセプトにしたDAZAI健康トレイルを古民家かなぎ元気村を拠点に展開している。日本三大美林・青森ひば林で森林浴のここちよさが伝わるリトリートプログラムになっていると自負している。

このようなリトリートプログラムの体験見本市『津軽海峡圏ウェルネス博』は、気が付くと20を超えるコンテンツがラインナップされた。思いを一つにできたラムダ委員のネットワークがこれを実現させたのである。



翌2021年、北海道・北東北の縄文遺跡群が世界文化遺産に登録された。残念ながらコロナ禍ということもあり、大きな話題とはならなかった。そこで、「縄文を盛り上げよう！」とラムダ委員で盛り上がり、縄文時代はウェルネスだったと妄想した津軽海峽圏縄文ウェルネス博を展開することになったのである。

縄文人の時間の過ごし方は幸福感に満ち溢れていたであろう。情報が飛び交うことも少ないから、様々な事象に振り回されることもない。その暮らしは笑顔に溢れ、ストレスが少なかったのではないか。そんなことを委員の間で共有しながら、縄文ウェルネス生活の一部を妄想で取り入れたリトリートプログラムがラインナップされた。津軽海峽圏縄文ウェルネス博である。コロナ禍にも関わらず、無事200名近い方に参加していただくことになった。

そして、このウェルネスという言葉からいよいよ、さらにこの津軽海峽交流圏を幸福な圏域にということで、今、Well-Being博を実現しようとしている。

津軽海峽交流圏のそれぞれの地域から選出された委員がリトリートプログラムを通じて地域で健康・幸福の小さな好循環を作っている。その小さな好循環がもっともっと各地に広がっていけば、かならず大きなうねりとなって、Well-Beingへ導く「津軽海峽交流圏」が具現化していくのであろう。そしてその根本にあるWell-Beingを具現化する地域資源がしっかりと次世代につながっていけば、ここちよい暮らしのある、だれにでも誇ることのできる、持続可能な津軽海峽交流圏が縄文の1万2千年以上続くかもしれない。



縄文の火焰式土器をイメージさせる  
青森ヒバ「踊りヒバ」の前でおどける

## プロフィール

大学卒業後、セールスプロモーションの会社に入社。その後、株式会社マインドシェアにて平成5年より地域活性化の仕事に携わる。ムラとマチをつなげる感動請負人として、「観光地域づくり人材育成」「観光地域づくり事業」「観光コンテンツ開発ワークショップ」など、全国各地で数多くの地方創生事業に携わる。現在は、株式会社ジェイ・ファインを立ち上げ、「ニッポンをこちよく」をテーマに、インバウンド向け観光コンテンツ開発による地域づくり、観光プラットフォーム「DMO」の立ち上げなどに携わる。一般社団法人かなぎ元気村理事を務め、奥津軽のアドベンチャー&ウェルネスプログラムを実践している。

関連ホームページ

かなぎ元気村: <https://kanagi-genkimura.org/>

津軽海峽圏 Well-Being 博: <https://tsugaruwellness.com/>



かなぎ元気村



津軽海峽圏 Well-Being 博



## 2

こん の ひろ のり  
**紺野 洋紀**

(株) JR 東日本青森商業開発 代表取締役社長  
 出身：東京都、居住地：青森市



活動紹介

◎ラムダ作戦会議での活動について

津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議には令和3年から参加しています。委員の皆様が“自ら汗をかき、自由に楽しんで”活動する姿を見て良い刺激を受けています。参加当初はコロナ禍のピークであり、津軽海峡交流圏をどのようにPRするべきなのか難しい面がありましたが、令和4年、5年には「青森・道南縄文産直市」を開催し、函館の委員の皆様と一緒に広域的なエリアとして観光PRを行うことができました。



キーコとマギューロウのコラボ

◎道南、青森県との関わりについて

「青森・道南縄文産直市」を通して、ラムダ作戦会議の委員以外の地域プレイヤーや自治体との交流が自然に広がっていきました。そして単なる一般的な観光物産展では出てこない珍しい商品や観光PRが発掘されました。それがラムダ作戦会議の持つ強みであり魅力なのだと思います。新幹線を起点として、地方ローカル線やフェリーなど新しい観光周遊ルートが立体的、越境的に生まれ、より多くの観光客が津軽海峡交流圏に来て地域が広域的に活性化することが目指すべきところです。地域や県・道単位、あるいは北海道や東北といった地域ブロック単位でなく、観



JR北・東、いさ鉄、フェリーの立体的観光PR



光客視点での広域的な観光周遊ルートの形成、エリア内交流人口の増加は、青森県と道南エリアにとって今後益々重要な戦略になると思っています。

### ◎今後の活動について

地方特有のものを活用し、観光やモノづくりの面で、首都圏やインバウンドなどより大きなマーケットを相手にするビジネスを生み出すのがポイントであると考えています。私たちは小売り・販売事業者ではありますが、今後も青森県という視点だけではなく、津軽海峽交流圏という広域的な視点で観光やモノづくり、商品開発を地域プレイヤーと連携を図りながら行っていきたいと考えています。



道南いさりび鉄道の  
模型展示と車窓動画

### ◎次世代に期待すること

次世代の津軽海峽交流圏人には、北海道新幹線札幌延伸に向け、連携と交流が更に拡大し、ビジネスとなっていくことを期待します。



JR東日本のホタテ釣り体験



縄文DOHMANプロジェクトの  
人気ワークショップ

### プロフィール

平成8年にJR東日本に入社。その後首都圏において駅ビルやエキナカの商業施設の開発や投資計画の業務を行う。令和3年4月から(株)JR東日本青森商業開発で代表取締役を務める。青森県内の駅ビルやA-FACTORYの運営、シードル醸造を通して地域と一体となって“くらしの魅力づくり”に取り組んでいる。

関連ホームページ (株)JR東日本青森商業開発 <https://jre-abc.com/>



## 3

すず き  
鈴木ただす  
匡

青森商工会議所 理事・事務局長  
 (青森県商工会議所連合会 事務局長次長)  
 出身・居住地：青森市

## 活動紹介

## ◎活動紹介

ラムダ作戦会議には、発足当初より委員として参加させていただいており、「津軽海峡圏縄文ウェルネス博」のお手伝いをしています。2021年9月からは、津軽海峡交流圏の地域資源を活用し、縄文をテーマとしたウェルネスプログラムをラインナップした体験型博覧会が開催されましたが、プログラムのひとつとして「浅虫温泉海山クア（健康）の道-ドイツ式健康ウォーキング」を提供致しました。これは、浅虫温泉の豊かな「海と山と温泉」を活用し、ドイツのクアオルトで行われている手法を取り入れた、「生活習慣病の予防・改善」「認知症の予防」「メンタルヘルスの改善」などに科学的なエビデンスを持つウォーキング手法です。



高低差で運動負荷調節

## &lt;クアオルトとは&gt;

クア（Kur）はドイツ語で「治療や療養のための滞在」、オルト（Ort）は「場所・地域」、あわせると「保養地」という意味となり、ドイツでは医療保険が適用となる地域のこと。温泉・気候・海・泥・水などの自然の治療要素とストレスから解放される転地効果を活用した保養や健康増進、治療が、医科学的な実証にもとづいて、地域全体の環境が保全された緑多く穏やかな景観のなかで整備された施設において行われています。



水圧で筋肉の乳酸を減少

## &lt;青函エリアとクアオルト&gt;

ここに暮らす私たちは“青森”という日本で一番美しい地名とそれに負けない



自然環境をいただいています。これからは、そのなかにただ身を置くのではなく、恵まれた自然を資源に人間的なものを掛け合わせて、さらに深い感動やよろこびに、価値を創りだしていきたいと思えます。



ヨガのプログラムも

多くの経済指標や統計では、青森の“厳しさ”が語られることも多いのですが、実際に暮らす私たちが一番知っているように、数字に表すことがむずかしい価値や豊かさが青森、さらには道南での生活にはあふれています。日本一美しい名前にふさわしい滞在プログラムをドイツ式健康ウォーキングをベースとして創りだし、新たな地域イメージを国内外に発信できるよう努力していければと思えます。

### ◎道南地域とのかかわり

青函の商工会議所はツインシティ締結以来34年間にわたり、事業所が相互に訪問して交流を続けているほか、事業所間のビジネスマッチングを支援する「パートナーシップ構築懇談会」を開催し、新たなビジネスチャンスの創出や拡大につながっています。



青函パートナーシップ商談

また、函館発祥の「バル街」に教えを乞うた「あおもりバル街」も定着しています。

私自身も東北新幹線新青森駅開業に向き合う事業を担当し、その後北海道新幹線開業にあたってノウハウの共有や情報交換を行い、同じ使命感を共有しながらこれまで取り組んできたため、函館の担当職員の皆さんとは特別な関係にあると思えます。

### プロフィール

1986年臨時職員として青森商工会議所に入所（時代はバブルの終盤、調子に乗り過ぎて2年間の正式採用見合わせ）以来37年にわたり、地域のお役に立てるように自分なりに務めてきました。事業畑で、時代毎の課題に対応するプロジェクトを担当することが多かったです。2000年前後のまちづくり三法に対応した中心市街地活性化の計画づくりやハード・ソフト事業、2010年の東北新幹線全線開業を契機とする観光コンテンツづくり、全県を対象とした「あおもり検定」公式テキストブックの編集と出版などは貴重な体験でした。「古川市場のっけ丼」を頑張って商品化できたことは少し自慢です。

関連ホームページ 青森商工会議所 <https://www.acci.or.jp>



# 4

はる い みつ ひろ  
春井 満広



道南いさりび鉄道（株）  
経営企画部企画営業課 担当課長  
出身：紋別郡湧別町（旧上湧別町）、居住：函館市

## 活動紹介

北海道の東、上湧別町出身の私は、平成28年3月の道南いさりび鉄道の開業に合わせて函館に参りました。初めて住む道南・函館は未知の世界で、新鮮なことがたくさんです。同じ北海道であるのに違うところがたくさん！そして本州を意識させられることが多く、勤務先である道南いさりび鉄道は、「地域の鉄道」ではありませんが、一方で全国と北海道とを結ぶ物流の要でもあります。辛いことも多いですが楽しく過ごして8年目となりました。

そんな中、令和3年より津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議に参加させていただきましたが、自分にはなにができるのだろうかと不安になりながら会議に出席したことも。委員としてまだまだ活動は乏しいですが、津軽海峡交流圏のPRや告知のイベントに関わってきました。

私自身は鉄道事業に所属していますので、この会議に参加することで、青森と道南のローカル鉄道が一緒にできる取組を企画することを意識するようになりました。



### News Release

令和5年5月1日  
函館バス株式会社  
道南いさりび鉄道株式会社

**道南バス株式会社・道南いさりび鉄道株式会社  
共催「日フリーきっぷ（いさりび1日カナル）」発売開始について**

道南バスと道南いさりび鉄道は、道南バスと道南いさりび鉄道（道南一帯のみ）全線が1日フリーきっぷ。自由に乗り降りできるフリーきっぷ「いさりび1日カナル」の発売を開始します。このフリーきっぷを有効にするには、「日フリー」を有効にする必要があります。有効期限は、乗車開始から乗車終了までの有効期間です。多くの駅に乗り降りいただけることを有効にいたします。広くご利用いただけますよう、ご協力をお願い申し上げます。

記

1. きっぷ名 : 「いさりび1日カナル」
2. 発売開始 : 2023年5月8日（月）から発売開始  
※ご利用開始7日前より追加で発売
3. 有効期間 : 1日限
4. きっぷの活用 : 下北の駅間を1日乗り降り自由。乗り降り  
・道南バス全線（道南一帯のみ）  
・道南いさりび鉄道（道南一帯のみ）  
（詳細は別紙）  
※上記の各駅間で乗車を可能とする駅は、別途、案内がなされます
5. 料金が : 大人1,600円、小人800円
6. 発売方法 : 電子チケットサービス「Dokona!!!」  
（スマートフォンで購入ができ、スマホ画面に有効になる電子チケット）  
※お支払いがクレジットカード決済のみ。7名分まで購入可能
7. 売切数 : 販売予定の乗客数に依りません。
8. 問い合わせ・お問い合わせ : 道南バス株式会社 企画営業課 TEL:0138-51-3960  
道南いさりび鉄道株式会社 経営企画部 企画営業課 TEL:0138-63-1977

以上

道南いさりび鉄道株式会社  
TEL:0138-63-1977 FAX:0138-63-1978  
URL:https://www.dokona.jp

函館バスとの共同企画





道南いさりび鉄道観光列車「ながまれ海峡号」を活用した企画

線路は続くよどこまでも…ではありませんが、鉄道は地域同士を結ぶ貴重なインフラだと考えます。しかしローカル鉄道を運営する事業者だけでは厳しいことが多いですから、他の鉄道事業者、さらには圏域内外のヒトやモノと繋がるのが大切だと思っています。

私は、この「ヒトやモノ」を繋げる接着剤の役割に徹し、圏域の魅力を高めることが地域にとっての幸せになると信じ、微力ですがこれからも取組・活動していきたいと思えます。



イベント列車内の様子

## プロフィール

大学卒業後、旅行会社2社において20年ほど道東の北見で勤務し、営業・企画などに携わる。その後、札幌に移り、その際に北海道新幹線開業前の二次交通調査事業などに携わり、2016年2月から道南いさりび鉄道に外向いて赴き、観光列車の運行や鉄道営業の立ち上げに関わる。2019年4月からは同社に転籍して利用促進や告知など鉄道営業全般に携わり今日に至る。北海道観光創造センターおよび北海道観光資源研究会、木古内町鉄道資源活性化協議会に所属。

関連ホームページ 道南いさりび鉄道 <https://www.shr-isaribi.jp>



## 5

まち だ なお こ  
町田 直子

NPO法人ACTY 理事長  
株式会社ACプロモート 代表取締役  
出身：大阪府、居住地：八戸市



## 活動紹介

ラムダ作戦会議には、初代から関わっており、今までラムダカフェや道南、青森対決の面白イベント等いろいろな取組を経て進化してきていると思います。委員それぞれの得意分野をいかし、ネットワークの広さをいかして委員自身が楽しんで活動できているのが良いです。

当初の青森県だけの活動が道南と一緒に進められることになり、人は海を渡るということにロマンを感じ、旅の気分が高まり、いかにも違う土地に来た！そんな気持ちになります（私だけ、ではないですね）。観光コンテンツ開発を仕事としている私は、道南と青森をつなぐ旅、そして縄文というつながりで遺跡をたずねるツアー造成をしました。これも一人だけの力ではなく、ラムダ委員の仲間と組み、それぞれがもつネットワーク、そして経験値、ツアー販売の達人たちが集まることにより可能になったツアー商品です。こんな風を楽しみながら知恵を出し合い、プロダクツ化から商品がうまれる過程は、このラムダ委員だからこそアウトプットだと思います。

それぞれが生み出してきた商品をお互いに体験しながら楽しさを伝えていきたいと思っています。自らが汗をかき形にしてきたものをまずは自分たちが楽しむ、これもラムダ作戦会議ならではの考え方でしょう。学生さんたちにもぜひ、体験してもらい楽しさを感じて



もらうだけではなく、ラムダ委員として活動し、そこから生み出されたものが商品になっていく過程をみてもらい、少しでも学びにつながってくれるとうれしいです。



これからは、若い人たちにももっとラムダ活動を知ってもらい、楽しさだけではなく厳しさを学ぶとともに仲間と新しいものを生み出していくことの達成感を感じてほしいです。青森は雄大な自然がいろんな形であちこちに驚くばかりのエネルギーを発していると思います。さらに食の豊かさは言うまでもありません。海に囲まれている青森なら魚介はもちろんですが、A5ランクの牛肉からブランドの肉類が豊富で、野菜、フルーツは産地が近いことから、新鮮で味の濃いものが味わえます。そんな青森とエキゾチックな趣の函館をはじめ道南とつながることで贅沢な体験ができます。新幹線でいけばアツという間の距離感で、全く違った情緒を味わえるかと思えば、縄文でつながる等、本当に楽しみ方は果てしないと感じています。ぜひ、もっと心の距離感が近づけばいいなあと思っています。



## プロフィール

大阪出身。米国大学では、国際マーケティングと広告を学ぶ。大手旅行社にて海外旅行のマーケティングと商品開発、また国際博覧会におけるプレスセンターで海外報道等を担当し、結婚後八戸に。八戸でNPO法人と株式会社の二つの組織にて、市民の声を反映し地域ブランディング戦略による地域プロデュースを展開。環境省所管の種差海岸インフォメーションセンター運営はじめ、自然環境の保全と活用を進め、観光という手段で地域の活性化を目指しビジネスを展開。

関連ホームページ 株式会社ACプロモート <https://acpromote.jp/>



## 6

やま だ  
山田 かおり

縄文 DOHNNAN プロジェクト 代表  
山田総合設計株式会社 地域ソリューション部 課長代理  
出身・居住地：函館市



## 活動紹介

人生の中でその先の未来へのきっかけはわからないもの。あるイベントの中で学芸員さんから教えられた“縄文の心”助け合いの心・絆。自然やものに感謝する心。温故知新。豊かな感性・芸術性を知ってから、子供たちに郷土愛を深めるまちづくりには、



キャラクターかぶりもの

このキーワードが重要だと直感し、2019年に縄文を通じたまちづくりを産学官民の有志ではじめました。自ら楽しみながら地域を巻き込もうと、オリジナル制作した縄文紙芝居を広め、周知を目的にグッズ制作など、動き出しながら考えていくスタイルで進んでいました。



世界遺産登録時お祝いにて

海を眺めると津軽半島が見え、近くても海の距離を感じていた青森が、縄文の力に引き合わされたかのように、距離がどんどん近くなっていき、2021年からラムダ作戦会議に参加してさらにぐっと距離が縮まってきました。

## ◎この年の夏からオンラインイベントに初参加し、秋には縄文ウェルネス博にも注力

15,000年前から10,000年以上続いた縄文時代から、青函の交易は海を渡って盛んに行われ、北海道へ栗を運んできたのも青森からといわれていることから、『栗のウェルネス』を題材に、菓子職人や料理人にも参加していただき、栗の特性を学び遺跡で体感するツアーを企画。



とにかく動くラムダ委員の方々と共に企画することで、気がつくと今まで経験したことのない新たな扉を開けて走っている状態でした。

翌年のオンライン番組参加の際には、青森×函館の火起こし対決を開催。共に創り上げ楽しむ心地よさを体感させていただきました。



縄文ウェルネス博 栗づくしの休日

遂には北海道を飛び出して、大宮駅で開催する『青森・道南縄文産直市』へ。2年連続して縄文の土偶づくりや切り絵昆布などのワークショップを担当。縄文遺跡群のPRパネルを通じて青函の観光PRも行い、複数のラムダ委員の方々と一つの事業を取り組み絆も深まったと確信しています。



青森・道南縄文産直市



縄文キッズの縄文紙芝居

縄文の心をきっかけに人が人を呼び、繋がりが生まれた津軽海峡圏の交流。新幹線で約1時間程で行き来できることから、互いの魅力を生かして広域全体の周遊観光で、より一層の絆を目指していきたい。後世にバトンを渡す、その日まで。

## プロフィール

生まれ育った函館を離れ、義理人情に厚く郷土愛の深い群馬県人の下での生活から、地元への想いに変化。2005年にUターンし現職と共に地域活動を開始。2019年世界遺産登録を前に行ったイベントで、自然と物に感謝し思いやりと助け合いの精神に触れ、“縄文の心”が函館のまちづくりをつなぐキーワードになると直感。翌月に産学官民の有志で『縄文DOHNANプロジェクト』を発足し代表就任。“縄文の心”で人とまちをつなぐをテーマに、道南地域が共に向上し、子供たちの郷土愛が育まれる事を願い活動を展開。地域とのコラボにより産業特性への関わりにも携わる。

関連ホームページ 縄文DOHNANプロジェクト <https://jomon-dohnan.com/>





ラムダ作戦会議には令和3年度から参加しています。ラムダ作戦会議参加前から、青森公立大学の非常勤講師をしたり、青函圏フォーラムで講演をしたりしてきましたが、ラムダ作戦会議参加後も令和3年度の青函みらい会議で講演したり、令和4年度の青函圏フォーラムで講演をしたりしてきたので、この5～6年は継続的に青函での講演活動が続いています。ただ、ラムダ委員になってから2年ほどはコロナ禍でラムダの活動自体が縮小状態だったので、実際のラムダの活動にほとんど参加できなかったのがとても残念です。これからは他の活動にも積極的に参加していけたらいいなと思っています。



ガイド中の様子

## プロフィール

函館市出身。北海道函館中部高等学校教諭、函館工業高等専門学校教授を経て2020年より現職。専門は観光学・観光地理学で「交通機関と観光への影響」や「観光振興とまちづくり」等をテーマに研究するとともに、「国土交通省函館開発建設部管内協働型道路マネジメント会議」委員長や「函館市観光アドバイザー会議」座長、「歴史・文化を活かした南北海道サイクルツーリズム推進協議会」会長などの公職を歴任。NHK「プラタモリ 函館の夜景はなぜ美しい?」の案内人でもある。



## 8

もり たつ お  
森 樹 男

弘前大学人文社会科学部 教授  
出身：富山県高岡市、居住地：弘前市

## 活動紹介

津軽海峡交流圏には、4年制大学だけでも15大学（青森県内11大学、道南地域4大学）あり、大学院、短大、高専なども含めると2万人近い学生がいるエリアとなっています。（各4年制大学の学部収容定員数を合計すると18,600人：青森県内15,440人、道南地域3,160人）。また、青森県から道南の大学へ、道南から青森県の大学へ進学することも珍しくなく、1つの交流圏内としてみなすと、圏外への学生の流出をわずかであっても抑制する効果が働いていると思われます。さらに、観光等で互いの地域を訪れることもあります。このように津軽海峡交流圏は、多くの若者がお互いに行き来しており、これが日常の姿の一つとしてあります。

津軽海峡交流圏を盛り上げるために大学としてできることは何か。その答えの1つが大学間交流を盛んにすることでした。弘前市には、「大学コンソーシアム学都ひろさき」という弘前市内の大学で構成する団体があります。また、函館市には「キャンパス・コンソーシアム函館」（CCH）という函館市内の大学等で構成する団体があります。そこで、ラムダ作戦会議が始まった後、津軽海峡交流圏を盛り上げるためにCCHに呼びかけ、大学コンソーシアム同士の交流が始まりました。現在は、年に1回函館市で開かれるHAKODATEアカデミックリンクに学都ひろさきから学生団体が参加し、交流を続けています



【写真1】  
HAKODATEアカデミックリンクに  
大学コンソーシアム学都ひろさきの  
学生団体「いしてまい」が  
参加した時の様子



【写真2】  
北海道新幹線開業前イベント  
「新幹線ドミノ」の様子



(写真1)。その関係で、北海道新幹線開業前のイベント「新幹線ドミノ」(北海道北斗市にて開催)にも学生を派遣したこともあります(写真2)。

そのほか、観光に関わる特設講義を開講し、現地研修として函館訪問や津軽海峡交流圏一周体験学習などを企画し、実施しました(写真3)。ただ、津軽海峡交流圏一周体験学習については台風の影響で途中で引き返すこととなり、津軽海峡交流圏を一周することができずに終わったことがいまだに心残りです。

私の津軽海峡交流圏形成に対する思いは、発足当時から作成してきたラムダの提案書の前書きに書かせていただいていますので、それを紹介して、終わりたいと思います。



【写真3】  
特設講義で訪れた木古内での研修風景

津軽海峡交流圏の誕生は、ある意味、異文化と異文化の交わりといえよう。異文化の交わりは相互に刺激を与え、新しいものを生み出す大きな力につながっていくと考えられている。津軽海峡交流圏も同じであり、青森県と道南の圏民パワーがぶつかり合う場だと捉えることができ、そこには何か新しいものを生み出す潜在的な力が秘められているということができただろう。1つ1つの取組は小さなものであっても、圏民それぞれが取り組んでいくことが起爆剤となり、次第に多くの人を巻き込んでいったり、圏外から人を呼び込むことができるようになると考えている。「(入(ラムダ)プロジェクトに関する提案 津軽海峡交流圏の未来を変える挑戦」(平成26年7月発行)前書きより)

## プロフィール

平成5年に弘前大学人文社会科学部(当時は人文学部)に着任。専門は経営学、特に国際経営論。現在は、副理事(社会連携担当)や大学院地域社会研究科長も兼務。その傍ら、観光系の授業の開発を行い、弘前大学観光マイスタープログラムを実施している。また、ラムダ作戦会議をはじめ、青森県や県内自治体などの委員会委員を務めている。

関連ホームページ 弘前大学大学院地域社会研究科 <https://ttag.hirosaki-u.ac.jp>



## 津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議アドバイザーからのメッセージ



### 日本銀行函館支店 中村慎也支店長

津軽海峡を挟んで向かい合う青森県と道南地域は、その地理的な近さもあり、多くの類似性を有するなかで、それぞれ独自の発展を遂げてまいりました。例えば、津軽海峡の恵みである水産物では、両岸で水揚げされるマグロは、(知名度に差はありますが…)共に地元が誇る名産です。また、「北海道・北東北の縄文遺跡群」は、まさに古くから両地域に跨って共通の文化圏があったことを示す好例です。他方で、観光をみれば、幕末以降に移入された西洋文化の影響を売りとする道南地域と、八甲田山や奥入瀬溪流など県内各所に大自然が広がる青森で大きな違いがあります。豊富な津軽海峡の恵みが身近にありながらも、ホタテの養殖が発達した青森と、イカ釣りを主力とする函館など、独自性にも目を見張ります。

類似性といえば、両地域では好ましくない事態が進んでいます。それは、全国平均を上回るスピードで進む人口減少です。人口の減少は、次世代社会を支える人口が減少していくことを意味し、地域社会を持続させていく上で非常に深刻な状況です。短期的な影響を見ても、消費活動を行う人口が減少し、経済活動を抑制する効果を生み出します。こうした中では、当地へ訪れてくれる人、関わりを持ってくれる人、ひいては移住してくれる人を増やす努力が必要でしょう。

一足飛びに移住者を増やすことは容易くありませんから、まずは関係人口を増やしていくことが重要です。人口減少が全国的な現象であることを踏まれば、自治体が個々に活動をしていくだけでは、なかなか注目を集められません。関係人口を増やす大きなムーブメントを起こすうえで、たくさんの類似性と特徴的な独自性をもった両地域が互いに協力し、そして切磋琢磨して盛り上げていくことがカギです。その核となる津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議の動きに、今後大注目です。



### 日本銀行青森支店 武藤一郎支店長

青森と函館には、1988年8月、中学3年生の夏に友人と旅行に来たことがあります。当時は新幹線が青森や函館まで通っておらず、学生旅行の定番であるJRの「青春18きっぷ」を使って長い時間移動しました。自治省の職員だった友人の父が青森県庁に赴任になり、青森ねぶた祭りを観に来いと誘ってくれました。濃い赤を基調としたねぶたの迫力と、沿道に溢れる跳人のエネルギーが記憶に残っています(その後、自分がこの祭りの審査員を務めるとは夢にも思いませんでした!)。

ちょうどこの年には青函トンネルが開通し、青函博が開催されていて、青森だけでなく函館にも行き、函館の海の幸を味わったのを薄らと覚えています。青函博はどちらかというとな青森で盛況でしたが、函館側でも当時、赤レンガ倉庫などウォーターフロント開発や函館山のロープウェイのリニューアルなどが行われ、青森・函館の両サイドで、津軽海峡地域を盛り上げようとの気運がありました。

2022年6月、まさに青天の霹靂という形で青森支店長として赴任することになり、縁があるなど思うと同時に、久しぶりに訪れる津軽海峡地域がその後どうなったのか、観てみたいと思いました。30年以上ぶりになると、青森と函館の間には新幹線が通り、「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界遺産となるなど、交通・観光が発展していました。青森県内各地はもちろん、函館にも先日訪れましたが、昔の面影も残っている一方で、駅前の街並みや交通が整備されて魅力を増したように感じます。

こうした個人的にも思い入れのある津軽海峡地域が、今後さらに発展してほしいと心から願っています。その点で、ラムダ作戦会議で皆様の熱い議論に参加できるのは望外の喜びです。是非、皆様の斬新なアイデアで、この地域の魅力をどんどん高めていただきたいと思います。

## 第2部 ケーススタディ：ラムダ作戦会議 in せんだい大志塾

### ◆ はじめに～自己紹介とラムダとの関わり～

#### 【大西】

本日は、「せんだい大志塾（以下、大志塾）」\*と「津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議（以下、ラムダ）」の連携企画として、官民協働による広域連携モデルであるラムダのケーススタディをパネルディスカッション（以下、PD）形式で行います。大志塾の塾生には事前課題として、テキスト「ラムダの教科書1」を読んで、ラムダの「優れた点」「課題」とあわせて質問事項を提出してもらいました。

PDでは、ラムダの議長である森先生を含む3名のラムダ委員とアドバイザーの大西で提出された質問事項に答える形で進行します。なお、本日のPDは、ラムダ委員とアドバイザーのみで構成されていますので、我々の見解が青森県庁の公式見解ではないことを念のためお伝えしておきます。

まず、3名のラムダ委員から自己紹介をお願いします。

#### 【森】（敬称略、以下同様）

弘前大学の森樹男です。出身は富山県高岡市ですが、幼少期に東北地方を転々としていました。子供の頃に見た弘前の桜が印象に残っていた影響か、弘前大学

### せんだい大志塾塾生への 事前アンケート結果 （29名による複数回答）

#### ■ 優れた点

1 自由度（楽しさ）	18
2 委員の多様性	17
3 広域連携	14

#### ■ 課題

1 情報発信不足	23
2 若手人材確保 （多世代連携）	18
3モチベーション維持	12

\* 2007年に青森県庁で実施された職員研修「せいでいあおり井蛙塾」をモデルに、2010年より仙台市が主催する東北の未来を担う人材育成プログラム。

の求人票を見た時に「ここだ！」と決めて以来、弘前で暮らしています。ラムダとの関わりは、青森と道南の大学間での連携（大学コンソーシアム連携）を利用して、学生の交流を実施してきています。

### 【奥平】

北海道教育大学函館校の奥平理です。専門は地理学で、ラムダはまだ4年目ですが、活動には積極的に関わってきています。2週間前にも、北海道新幹線の新函館北斗駅で津軽海峡交流圏の交流イベントを開催しました。イベントにはゼミの学生にも参加してもらいましたが、積極的に関わりを持とうとする様子を見ていて、学生たちが地域の活動に参加することの重要性を再認識しました。



### 【山内】

紀行作家の山内史子です。東京在住ですが青森市の出身なのでラムダにお声かけいただきました。ハリー・ポッターやピーターラビットなどイギリスファンタジーの世界をはじめとする物語や歴史の舞台を訪ねて文章を書くのが本業で、行く先々でご当地の酒を飲み、旨いものを食べることを楽しみにしています。日本銀行広報誌「にちぎん」の連載「地域の底力」で、全国各地で活躍している方々を紹介しています。

### 【大西】

私からは「せんだい大志塾塾生への事前アンケート結果」について紹介します。一番数が多かった質問事項は、「次世代への橋渡し・若者の取り込み」で55票（複数回答、以下同様）。次が、「委員選定基準」で15票。そして、「費用負担・財源」が11票、活動中の「苦労話・失敗談」が9票です。最初に、ラムダ委員に選ばれた経

## せんだい大志塾塾生への 事前アンケート結果

（29名による複数回答）

### ■質問事項

1 次世代への橋渡し・若者の取り込み	55
2 委員選定基準	15
3 費用負担・財源	11
4 苦労話・失敗談	9



緯を教えてください。

### 【奥平】

突然、青森県庁から「ラムダ委員になっていただきたい！」と電話があり、「いいですよ！」と回答したら、すぐに委嘱状が届きました。青森での津軽海峡を挟んだ交流活動は知っていました。道南・青森県で活動しているグループ「津軽海峡マグロ女子会（通称：マグ女）」の青森側リーダーの大間町の島康子さん（ラムダ委員）とは面識があって、「彼女がいるのなら私も参加してみたい！」と思っていたら突然に電話がきたので驚きました。

### 【大西】

ラムダも発足当初は青森県側の委員だけで活動していました。今でこそ「津軽海峡」交流圏ですが、以前は先頭に「青森県」が付いていたのです。活動エリアは道南地域も含めた津軽海峡交流圏でしたが、活動予算はすべて青森県が負担していました。「東北連携」をテーマに学んでいる塾生は、県境を越えた広域連携に関心があると思います。宮城県が山形県と一緒に新しい事業をしようとする面倒な調整が必要になります。しかも、ラムダの場合は地域ブロックも異なっているので、もっと大きな障壁があったと思います。北海道側の委員も加えようというアイデアは、誰が言い始めたのでしょうか？

### 【森】

元々アイデアはあったのですが、青森県庁の予算で北海道側の委員を加えることについて、県庁内でも議論があったと聞いています。

### 【大西】

仙台市では市の予算で実施している大志塾に東北各市から塾生を受け入れています。2010年の大志塾発足から当初3年間は、仙台市職員のみが対象でしたが、4年目以降は、東北各市に声を掛けて塾生を募ってきました。今年度の大志塾には8都市（青森市、八戸市、盛岡市、一関市、奥州市、山形市、福島市、郡山市）から塾生が参加しています。

ラムダが目指しているのは、青森県と道南を一体と捉えて津軽海峡交流圏として、他地域からの交流人口を増やすことで、仙台都市圏や首都圏、札幌など北海道から人を呼び込むことが“一丁目一番地”です。もう一つの目的が、地元



住民を圏域内で回遊させることです。道南の住民にはもっと青森へ来てもらい、青森市だけでなく弘前や八戸にも行ってもらう。また、青森県内でも下北半島の住民には津軽半島に、八戸の住民には弘前に行ってもらおう。このような活動を進めていくには、ラムダ委員自らが圏域を動き回りその実態を知る必要があります。

### 【山内】

青森県の地方紙「東奥日報」でエッセイを連載していたことがきっかけでラムダ委員に選んでいただいたのかと思います。他の委員は県内で地域振興活動がされているので、当初は私みたいな人間が本当にお役に立てるのか不安でしたが、委員の間で意見をかき混ぜたり、新しい企画のヒントを提供したり、あるいはメディアで活動をご紹介したりと、少しは貢献できているかもしれません。

### 【大西】

山内さんとはラムダ発足から10年来の長いお付き合いです。ラムダの活動を山内さん流に表現していただくと、“賑やかイベント”が格調高い地域貢献活動に変換されるので、ラムダは本当に素晴らしい広報担当を取り込んだと思っています。

### 【森】

北海道新幹線開業の数年前から青森県で開催されていた新幹線関連セミナーで「新幹線と在来線を合わせた線形をギリシャ文字の「λ（ラムダ）」に見立てよう！」といった話が紹介されて、マスコミでも取り上げられました。その頃に県庁からラムダ委員にとお声掛けいただきました。当初は、“学識経験者枠”で会議の司会進行といった仕事だと考えていたのですが、いざラムダ委員になってみると「メンバーの掟」が存在していて、「自ら汗をかく」活動をしなければならないと不安になったのを覚えています。

ラムダの命名者については諸説ありますが、公式には前青森県知事の三村さんということになっています。当初は「大入り大作戦」という候補もあったようです。

### 【大西】

ユニークなネーミングセンスです。ラムダの長い方の線は、青森県の八戸駅か



ら新青森駅を經由して津軽海峡を渡って北海道の新函館北斗駅までの北海道新幹線の経路を示しています。もうひとつの短い線は、新幹線は通っていませんが奥羽本線の新青森駅から弘前駅までを示していて、この2本を合わせてラムダと呼んでいます。

## ① 「津軽海峡交流圏」 誕生の背景

### 【大西】

ラムダが発足した背景には、当時は青森県が終着駅であった新幹線が「青森を乗り越して北海道に行ってしまう！」という危機感がありました。八戸駅開業の際には、「青森県に初めて新幹線がきた！」ということで、イベントだけでなく中心街に屋台村「みろく横丁」も開業するなど大いに盛り上がりました。新青森駅は2度目の開業で、観光キャンペーンで人を呼び込もうというタイミングで東日本大震災が発生してすべて自粛となりました。今回は3度目の開業で、津軽半島今別町にできた新駅が「奥津軽いまべつ駅」です。

首都圏から新幹線で北海道に向かう観光客は、途中にある青森のことはほとんど意識しません。このままでは、観光キャンペーンもすべて「開業した北海道新幹線で北海道（函館）に行こう！」となってしまいます。そこで、危機感を持った青森県が考えたのが、「青森と道南は一体」という発想です。前知事の三村さんがラムダ発足式の挨拶で「縄文時代には北海道と本州は地続きでつながっていてマンモスが行き来していた。津軽海峡は海水だから“しょっぱい川”だ」といった話を紹介されていました。今考えればかなり強引に聞こえますが、「ラムダ委員の力で交流圏を賑やかにしてください！」と一人ずつ声を掛けながら知事が委嘱状を手渡していったのです。

### 【奥平】

津軽海峡をはさんだ函館と青森の間にはラムダ以前にもともと交流があり、深いつながりができていました。両地域の交流に大きな役割を果たしたのが青函連絡船で、明治41年から昭和63年まで約80年間、北海道と本州を結ぶ大動脈として機能していました。青函連絡船での物流を支えていたのは青森の農産物を北



海道に背負ってきていた青森側の女性たちです。積荷のメインは当時北海道では貴重だった米で日本酒やりんごも運んできて、逆に函館からは昆布や身欠きにしん、イカなどの海産物を持って帰りました。

私が話している函館弁は青森の2つの方言の標準語だといわれています。つまり、津軽弁と南部弁の中間の言葉です。昔から函館には青森の津軽・南部両地域から人々が往来していましたが、時には互いの言葉が通じないこともあり、双方が理解できるような中間の言葉が生まれたのです。これも両地域の文化面でのつながりの深さの一例です。

## ② 津軽海峡交流圏における交流と課題

### 【大西】

津軽海峡交流圏での大学生の交流はいつ頃から行われていたのでしょうか？

### 【森】

ラムダが始まって2～3年ぐらい経ってからです。弘前大学にも北海道出身者がいますので、入学以前の交流もあったと思います。函館からは中学校の修学旅行で青森や弘前にも来ているので、中学校の時に弘前に来て街を歩いた記憶からなのか、大学受験の時に見覚えのある弘前大学を選んだという学生もいます。若い頃の記憶や印象はとても大事ですね。

### 【大西】

両地域間の往来、津軽海峡を渡ることについて、学生たちにほとんど抵抗はないようです。今でも学生たちは新幹線ではなくフェリーをよく利用しているそうです。青森・函館間では昔から学生に限らず、住民がお互いの街をぶらぶらしたり買物に行くような関係もあったのでしょうか？

### 【山内】

私が青森に住んでいた頃から、函館はデパートで扱う商品の種類が多くて、青森市民にとっては憧れの街でした。青函連絡船も日常的に利用していて、特に2等船室は料金も安くて広々とした空間に寝転がってゆっくりと過ごせたので、気軽に行き来できました。



### 【大西】

今年の大志塾は、「東北地域の交流人口や関係人口を増やす！」をテーマに掲げています。津軽海峡交流圏での住民の動きは、観光ではなくお互いの地域を行き来する関係です。自分たちの生活の一部として、普通に海峡を越えて行き来するような関係が築かれているのが津軽海峡交流圏なのです。この圏域には「青函」とか別の呼び方もありますが、この10年間はラムダ委員が頻繁に津軽海峡交流圏の名称を使ってきたので、圏域内には少しずつ浸透しています。

ラムダの課題として塾生からも「情報発信不足」が指摘されていますが、津軽海峡交流圏の名称についても圏域外には十分に発信できていません。「北海道の一部（道南）と青森県が一体」という考えは、実際に地図を見せながら説明してもなかなか理解してもらえませんか、津軽海峡交流圏の名称を浸透させることは、今後も我々にとって大きな課題です。

## ③ ラムダの活動原資

### 【大西】

プロジェクトの財源の重要性については、大志塾でも毎年指摘しています。ラムダの予算額と予算配分について教えてください。

### 【森】

今年のモデル的なプロジェクトを実施するための予算額は250万円で、これを5つのプロジェクトに分けるので1件あたり約50万円です。

### 【山内】

ラムダも約10年続いているので、財源である予算額やプロジェクトの進め方も変化してきています。今年度は年度当初に予算額が示されたうえで、具体的な事業を予定している委員がメンバーを募ってチームを組み、それぞれが企画書を出して認められたチームに配分される仕組みでした。ただ、正直なところ予算額は必ずしも十分ではありません。予算では旅費が賅えず、他の仕事と組み合わせる活動に参加したこともありましたが、要は「予算が足りなければ、なんとか工夫する！」ということです。



**【大西】**

コロナ禍以前は、活動内容ごとに3つのチーム（例：令和3年度は、「産業振興」「人材育成」「情報発信」）を設定し、それぞれのチームリーダーを決めて、そこにラムダ委員（アドバイザー含む）が参加して活動していた時代もありました。ラムダの発足当初は会議しか行っていなかったと記憶しています。

**【森】**

最初の頃は、いきなり事業を行うのではなく、まずは「提案“アイデア”集づくり」から始めました。青森を通り越して北海道新幹線が開通するという緊急事態に備えて、青森が何をすべきかについてラムダ委員で知恵を出し合うことで、毎年提案集を出し続けたのです。意見交換の場として会議の開催費用は予算化されていたので、「どうせ会議をするのなら、県庁会議室ではなく、圏域内のあちこちで開催してはどうか？」といったアイデアが出て、青森市内だけではなく、八戸市や弘前市、函館市など圏域内主要都市でも現地視察も含めて会議を行ってきました。当時の県庁内では、予算書の項目で「ラムダ印」が付くと別枠で少しプラスになったという噂もあり、ラムダは県庁内でも特別扱いされていたようです。

**【大西】**

ラムダ委員の多くはもともと自分たちが実現したい企画があって、ラムダで自身の企画が「圏域の交流人口増加に寄与する」と認められれば、県からの予算が配分されます。一方で、県庁側もその企画が実現することでラムダの実績になるので、まさに「ウィンウィンの関係」でした。このような仕組みは一体誰が考えたのでしょうか？

**【森】**

青森県庁の交通政策課の担当者が、「ラムダ委員が頑張っているのだから、なんとか支援することで、圏域をもっと盛り上げてもらいたい！」という考えから、ラムダ委員の活動内容を聞きながら、それらを支援できるような予算の仕組みを一生懸命工夫されていました。

**【山内】**

ラムダ委員同士で話をしていると、「次はあれをやろう！」と勝手にどんどん発想が広がって、最終的に新しいビジネスや企画が生まれています。つまり、県



庁からの予算はラムダ委員にとっては燃料であり、燃料を補給していただくことで活動が盛り上がっているのです。

#### 4 ラムダ「メンバーの掟」～委員自ら汗をかく～

##### 【大西】

「ラムダ委員が頑張っている！」のは本当で、ラムダ委員はこれまでもしっかり汗をかいてきました。初期の頃には、自分たちが企画提案したイベントを自分たちで実行したこともありました。

##### 【山内】

函館市の五稜郭タワーのイベントステージを借りて開催した「津軽海峡交流圏公開生バトルIN函館」です。ラムダ委員の総力をあげて開催まで漕ぎつけました。イベント当日が北陸新幹線の開業日と重なっていたので、サブタイトルも「祝・北陸新幹線開業 だけど 次はこっちだ 道南と青森県が一つになるぜ」と挑戦的なネーミングにしました。イベント内容は、津軽海峡交流圏の形成に向けて、道南と青森県の双方の魅力を「異文化交流」という形で圏域内外に情報発信しようというものでした。

##### 【大西】

トークバトルでは、ラムダの公式キャラクターの「マギユロウ」も参加した「強烈ゆるキャラ」対決に加えて、「街の伝説」「方言」「ご当地グルメ」対決。両地域の大学生たちによる「ふるさと愛」対決もありました。また、一番盛り上がったのが、当時、地元函館で北海道新幹線の機運を盛り上げるために結成された「函館はやぶさPR隊」全員が新幹線はやぶさ号のボディースーツ姿で登場し、青森側も当時、農業活性化アイドルであった「りんご娘」との「ご当地体操」対決でした。会場参加者には両面に「青森県」「道南」のシールを貼った団扇を配布して勝敗を投票してもらうなど大盛況でした。このイベントはすべてラムダ委員の手づくりで実現しました。企画のテーマ設定やシナリオ作り、会場選定から参加者への声掛けといった事前準備に加えて、当日の運営も司会進行はもちろん、出演者として舞台上に立ちながら、裏方として与えられた役割もこなすな



ど、ラムダ委員としてしっかりと汗をかきました。

イベント以外でも、ラムダ委員の提案でラムダの広報用動画を作成しました。函館で活躍していたバンド「木下さんと『愛と哀しみの黒汁楽団』」がつくった北海道新幹線応援ソング「新幹線に乗っちゃって！」に、ご当地アイドルを輩出している弘前市の芸能事務所「リンゴミュージック」に振付をお願いして「りんご娘」のビデオメッセージで振付指導を受けながら、ラムダ委員で会議の後で集まって練習したこともありました。

ラムダ委員は県庁の予算で圏域外先進地への視察も経験させていただきました。例えば、海峡つながりでは、瀬戸内海（高松・福山・尾道・広島）や関門海峡（北九州門司港・下関）にも遠征しました。

#### 【森】

青森県内では津軽海峡に面した大間町や龍飛岬から新駅のできる今別町、道南の木古内町や松前町、江差町、大沼公園などを視察して、各地で活動しているラムダ委員同士がお互いの活動を知ることができたので印象に残っています。さらに、海峡同士の交流など他地域での活動を見聞きした経験が役に立っていて、これらをラムダにフィードバックすることで、新しい企画につながっていきました。

## 〈質疑応答〉

### Q1 新たな企画が生まれる仕組み

#### 【塾生からの質問】

ラムダの企画はどのようなきっかけで生まれたのでしょうか？

#### 【森】

飲み会の席で生まれたものが多いですね。コロナ禍以前は正式な会議の前後に必ず飲み会、ラムダ委員が自由に話のできる環境が用意されていました。ラムダ委員は過去に青森県主催の会議やイベント等で出会っているケースも多いのですが、昼間の会議で一緒になっただけでは打ち解けて話をする時間はありません。



自主的に集まって話が盛り上がった結果、「一緒に何かやってみようよ！」みたいなところから新しい企画が生まれることが多かったですね。

### 【山内】

飲み会は重要です。イベントの内容もラムダ委員同士と一緒に飲んでいて、たとえば「地元の日本酒と青森県民のソウルフードであるイギリストーストを合わせてみてはどうだろう！」と提案すると、「面白いからイベントに取り入れよう！」と発想の幅が広がっていく。正式な打ち合わせではないところで、礎が積み重なっていった部分がありました。

### 【奥平】

北海道でも「ラムダのイベントが青森ばかりだと、北海道側は恥ずかしいね！」みたいな話から、「そろそろ道南でも何かやろう！」と北海道庁の渡島総合振興局がやる気を出してくれました。道南地域を走る「道南いさりび鉄道」という第三セクターに「コラボして何かできないか？」と話を持ち掛けたら、今度は鉄道会社側が乗り気になって、「JR北海道も巻き込もう！」となってJR北海道にも参加していただき、イベントを契機にさまざまなコラボレーションが実現しました。



## Q2 広域連携による相乗効果

### 【塾生からの質問】

青森市、函館市単独での町おこしもできますが、広域でつながることにより大きなインパクトや相乗効果が生まれるなど、広域連携のメリットについて教えてください。

### 【森】

仙台市や青森市なら単独での活動でも多くの人の目に留まるのですが、小さな市町村は活動していてもなかなか見てもらえません。ラムダの活動やマグ女の



「セイカン博覧会\*\*」や「津軽海峡縄文ウェルネス博」のように、地域が連携して個々の活動を一括りにまとめて情報発信すれば、点を線や面にして見せることができるのです。圏域外への発信という点では、地域が連携することで相乗効果を発揮できると思います。

### 【山内】

八戸のラムダ委員と江差町の委員のように、これまで縁のなかった委員同士がラムダで意気投合したことで、世界文化遺産になった道南と青森の縄文遺跡を結ぶツアー商品が誕生しました。圏域内各地域の取組み（点）をつなぐことで、観光客を回遊させる「道」ができています。ラムダを通じて、委員同士が圏域内のお互いの地域を知ることで、自分たちだけでは考えも及ばなかったような効果が生まれています。

## Q3 ラムダの成果（交流人口の拡大）

### 【塾生からの質問】

ラムダの成果として、交流人口や関係人口が増加したという実感はありますか？

### 【森】

圏域への意識、関心が高まっている感覚はあります。青森の地方紙でも日常的に函館の出来事を掲載していますし、時には1面に函館の記事が掲載されることもあります。そういう記事を目にすることで、函館に親近感を覚えて自然と行き来する機会も増えています。私自身もラムダが始まる前は、函館に学生を連れていく機会は何年かに1回でしたが、今は毎年2、3回は函館に行っています。圏域内でも意識の高まりとともに、お互いの地域に足が向くようになっているのではないのでしょうか。

\*\* 2016年の北海道新幹線開業を契機に、青森&みなみ北海道のパワフルな女性によって結成された、まちおこしグループ「津軽海峡マグロ女子会（マグ女）」が各地で実施する誘客プログラムを、1つの博覧会という形式で毎年10月～11月に実施しているもの。（マグ女のセイカン♥博覧会 イベント公式サイトより）



### 【山内】

慣れ親しんだ青函連絡船が廃止になって、一時、青森と函館の関係が薄くなったと感じた時期もありました。その後、ラムダがあの手この手で圏域の関係を結び付け、交流の機運を盛り上げていったことで、お互いを意識し合う関係は強まっています。実際に、企業も青森と函館の連携に関心を持つようになって、両地域の企業がコラボレーションした新商品も生まれています。そういう意味で、ラムダの成果も少しずつ広がっているのかなと嬉しく思っています。

### 【奥平】

私のゼミ生17人のうち青森出身は5人、秋田出身は6人もいます。函館校全体の新生でも、道南の渡島半島出身が2割、道内（渡島半島除く）が4割で、残り4割は東北各地の出身です。函館はもともと他地域との交流が盛んであった街ですが、実感として東北出身者が増えている印象があります。

また、以前に比べると、函館から青森に行く人が増えています。キーワードは日本酒で、函館は地元の蔵元が1軒もなかったのが、最近になって酒蔵が2軒もできて、日本酒が脚光を浴びています。日本酒の本場である青森に日本酒を飲むことを目的に訪れる人が増えているのです。

## Q4 圏域内での交流の重要性

### 【塾生からの質問】

これまでのラムダは圏域外からの交流人口増よりも、圏域内での行き来を対象とした企画が多かったのですが、圏域外に向けた取組みもやっているのでしょうか？

### 【山内】

圏域外への情報発信は今後の課題です。ラムダ発足から7年くらいは、地道に圏域内外に交流の種を蒔いてきたのですが、コロナ禍で一時活動を停止していた期間がありました。ただ、その間もラムダが率先して取り組んだのが「オンラインイベント」でした。ラムダ委員が中心となって、青森と道南の両地域の関係者を巻き込んで、圏域各地のコンテンツを束ねてプログラムを作成しました。「オ



ンライン夏祭り」では青森市のねぶた祭に代表される地域発のお祭りの雰囲気を感じることができるイベントや、「オンライン青森冬景色」では雪国らしい風景や生活を紹介するプログラムを実施しました。圏域外、海外からも参加者を呼び込むなど大盛況でした。コロナ禍のかなり早い段階から、ラムダ委員の間でオンラインイベント導入の可能性について議論を始めていたからこそ、コロナ禍にめげることなく乗り切れたと思っています。

### 【大西】

コロナ禍では、全国各地で一斉にお祭りや大規模な集客イベントが中止になりました。お祭りで人が集まること自体が危険でNGでしたが、ラムダでも「何かやれることはないのか必死で考えて“悪あがき”した地域と、完全に“思考停止”した地域では、コロナ後に絶対に差が出ます！」と主張しました。コロナ禍を経験したことで、「圏域外から人が来なくても、圏域内だけでも人が動いていればいけないか！」という考えに至り、実際に圏域内の活動だけは辛うじて生き残りました。ラムダの活動は、「内輪受け」でいいのです。ラムダ委員が楽しく活動していることで、「なんか楽しそう！」といて参加してくれる人たちがいれば我々はウェルカムです。

我々の悩みの種は、交流人口も関係人口もその数値が統計として現れてこないことです。「ラムダの成果を数字で示せ！」と言われても正直わからない。ラムダの活動を通じて、我々の方では「まだまだつながっていない」と思っているも、相手側では「十分につながってる」と思っている人もたくさんいるようです。特に、コロナ禍に何度もオンラインイベントを経験しているので、イベント参加者の方の中には、実際に現地にきたことも会ったこともない人でも圏域に親近感を持っているという話も伺っています。我々が意識している以上に、津軽海峡交流圏の交流人口、関係人口は広がっているのかもしれない。

## 5 まとめ～大志塾の塾生へのメッセージ～

### 【森】

塾生の皆さんは市職員ですが、ぜひとも地域の人たちがうまく活動できるよう



に支援していただくと、東北ももっと盛り上がっていくのではないのでしょうか。仙台市はグローバルスタートアップ支援に取り組まれています、その支援対象が仙台市内の学生だけでなく東北全体の学生も支援する仕組みになっていて、弘前大学の学生も2名、仙台市の予算でスタートアップ支援を受けています。これからも自治体の境界を超えたこういう取組みがどんどんできるようになればいいですね。

### 【奥平】

塾生の皆さんには、イベントのような地域の活動を支える役割を果たしていただきたい。支援を受ける人の考えをしっかりと聞いてあげてください。そうすれば、必ずそのイベントはうまくいきます。

地域のお祭りは人の移動や交流に伴って、さまざまな形で広がっています。青森のねぶた祭りは北海道に広まって「ローソクもらい」になっています。ねぶたのお囃子「らっせー、らっせー、らっせーら」は「蟬燭出せ、出せ、出さないとかっちゃんぞ」という意味で、「ローソクもらい」はもう青森では残っていませんが、札幌や函館など道内各地では今でも根付いています。かつて移民で北海道に渡った人たちがお祭りの原型をそのまま残したのです。お祭りや文化が広がっていくのは、地域の人々がきちんと活動を支えてきた結果です。皆さんの地域でもしっかりと支えてあげてください。

### 【山内】

ラムダの特徴は、予算とか組織とかを一切考えずに、まずは「面白そう！」みたいなところから始まっている点にあります。最初からガチガチに枠を固めてしまうのではなく、まずはアイデアありきで行動できる自由度が高く評価されたのだと思います。塾生の皆さんも「発想の自由度」はぜひ尊重するようにしてください。

今後は塾生の皆さんにも、東北から津軽海峡交流圏、東北から道南、北海道というエリアの持つ可能性について、改めて考えていただきたい。意外な教科書かもしれませんが、「ゴールデンカムイ」という漫画は、津軽海峡の道南と青森がいかに近かったか、あるいは北海道との文化の違いをわかりやすく解説してくれています。歴史を振り返って、その土地のつながりや関係性を知ることが、多少



なりとも皆さんの仕事の役に立つのではないかと思います。

### 【大西】

ラムダ委員はしっかりとアンテナを張っている方々が集まっているので、「コロナ禍の今ならオンラインイベントがいい」とか、「現代は健康志向だから地域独自の縄文文化と健康を組み合わせたら面白い」とか、さまざまなアイデアが湧き上がってくるのです。また、アイデアを実現するためにはスピードが必要です。一年かけてじっくりと企画を練っていると旬を逃してしまいます。「今できることをやる」というのがラムダの特徴です。



塾生の皆さんはラムダのメンバーに市町村が入っていないことを不思議に思われているかもしれません。これは、青森県庁が県域の隅々にまで目配りできているからであり、この点が青森県のすごいところです。地域県民局も含めて、県庁職員が県内市町村で活動している地域おこしに熱心な人材をしっかりと把握していて、長年にわたって県主催の研修会などで地域人材の顔合わせの機会をつくり交流させてきているのです。このような背景があるので、多くのラムダ委員はまったくの初対面ではなく、「あなたとは県庁の別の会議で会ってますよね!」とか、「あの時は全然話もできなかったけれど、一緒に仕事ができて嬉しいね!」といった会話があちこちから聞こえていました。

自治体職員に担っていただきたい役割のひとつが、自らの地域で頑張っている人材を域外に連れ出して他地域の人と交流する「他流試合」の機会を作ってあげることです。地域人材のネットワークを通じて、間違いなく人材育成につながっていきます。ラムダはこれまでの県庁の取組みの結果（成果）であり、これからの取組みのきっかけにもなるのです。塾生の皆さんにも、青森県のような地域人材を育てる取組みをぜひとも行っていただきたい。これから先も東北地域のどこかで出会った人たちが、「きっかけは市主催のイベント（研修）でしたね!」といった会話があちこちで聞かれるように、東北での種蒔きを続けることをお願いします。

以上



## 編集後記

『ラムダの教科書2』をお読みいただき、ありがとうございました。

第1部の「ラムダ委員の活動紹介」では、ラムダ委員の様々な活動を知ってもらえたのではないのでしょうか。ラムダ委員の活動に興味を持った方は、ぜひご連絡ください。

また、第2部のケーススタディはいかがでしたか。この第2部では、仙台市職員研修所のご協力のもと、「せんだい大志塾」14期生29名の塾生の皆さんに事前アンケートを実施して、東北各市の自治体職員からみたラムダの優れた点や課題を指摘していただくとともに、約2時間に及びパネルディスカッションと質疑応答にも積極的に参加いただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

最後になりますが、ご執筆にご協力いただいたラムダ委員の皆様、そしてアドバイザーの皆様にお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。(森・大西)

## 津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議委員

「λ(ラムダ)プロジェクト」を推進するエンジン役となるのが、青森県と道南地域の民間委員で構成する「津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議」です。この会議は、現場で様々な成功事例を生み出し活躍している方々に就任していただいています。委員の方々には、これまでにない新たな視点で、交流圏形成に向けた様々なアイデアを提案していただくようお願いしており、併せて、委員自らが、自らのフィールドで津軽海峡交流圏の形成に向けた活動に取り組んでいただくこととしています。

### 津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議

#### メンバーの掟

- 津軽海峡交流圏を元気にしたいという  
熱い想いがある
- 前向きである
- 面白いことが好きである
- 自ら汗をかく
- 交流圏形成の頭脳である

#### λ(ラムダ)プロジェクト シンボルキャラクター

#### マギュロウ

プロフィール

☆出身：青森県

☆年齢：ヒミツ

☆特技：おへそが光る

☆好きな食べ物：おいしいイカ

☆チャームポイント：おなかぼっこり



## 令和5年度津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議 委員名簿

### ■委員 (50音順)

	所 属	職 名	氏 名
1	一般社団法人かなぎ元気村	代表理事	伊藤 一弘
2	北海道旅客鉄道株式会社函館支社	営業次長	及川 孝
3	一般社団法人北海道商工会議所連合会	政策企画部 政策企画担当・ 商工会議所支援担当	小川 竣騎
4	北海道教育大学函館校	准教授	奥平 理
5	株式会社百舌		尾崎 伸行
6	八戸せんべい汁研究所	所長	木村 聡
7	株式会社ジェイ・ファイン	代表取締役	木谷 敏雄
8	東日本旅客鉄道株式会社盛岡支社青森営業統括センター	副所長	工藤富士雄
9	株式会社JR東日本青森商業開発	代表取締役社長	紺野 洋紀
10	Yプロジェクト株式会社	代表取締役	島 康子
11	公益社団法人弘前観光コンベンション協会	事務局長	白戸 大吾
12	青森県商工会議所連合会	事務局次長	鈴木 匡
13	公益社団法人青森観光コンベンション協会	企画事業部次長	関 一生
14	おいらせ自然楽校	代表理事	二本柳亜希
15	株式会社また旅くらぶ	代表取締役	高木まゆみ
16	有限会社リンゴミュージック	マネージャー	樋川由佳子
17	道南いさりび鉄道株式会社	経営企画部 企画営業課 担当課長	春井 満広
18	NPO法人ACTY	理事長	町田 直子
19	フリープランナー		三津谷あゆみ
20	江差いにしえ資源研究会	会長	室谷 元男
21	弘前大学人文社会科学部	教授	森 樹男
22	紀行作家		山内 史子
23	縄文DOHNANプロジェクト	代表	山田かおり

### ■アドバイザー

	所 属	職 名	氏 名
	独立行政法人日本スポーツ振興センター	理事	大西 達也
	日本銀行函館支店	支店長	中村 慎也
	日本銀行青森支店	支店長	武藤 一郎



ラムダの教科書編集委員

森 樹男 (代表)

山内 史子

奥平 理

大西 達也

2024年2月 発行

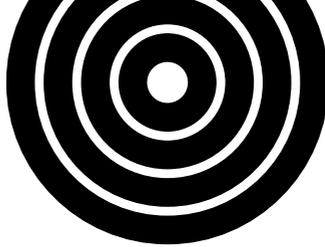
発行 津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議

問合せ先 青森県企画政策部

交通政策課 新幹線・地域交通グループ

電話：017-734-9152

FAX：017-734-8035



SLA  
TOP SECRET



SLA  
TOP SECRET

